

令和3年度事業実績報告書

社会福祉法人 椎原寿恵会

佐賀事業部

<特別養護老人ホーム 真心の園>

平成29年12月より休止中の旭1階の1ユニット再開を1番の課題として取り組みを行ったが、介護人材不足や職員の退職等もあり、令和3年度も再開する事が出来なかった。職員不足は現在も慢性化している為、外国人留学生等に活躍の場を提供しながら、新規職員の獲得・育成と現任職員の負担軽減に努めていく。

入居者の高齢化・重度化も継続しており、年間45名の方の永眠や長期入院による退居があり、新規入居が追い付かず、特養の入居者数129名（長期入居120床、ショートステイ定床化枠9床）を充足する事が出来なかった。最終の稼働率は、85.7%と目標にしていた95%を大きく下回ってしまった。

令和4年度は介護医療連携室が新しく新設された為、自前での営業活動とともに連携室と連携し、新規入居者確保に努める。協力医療機関であるまごころ医療館とは引き続き、連絡・連携を密に行い、ショートステイ長期利用者を含めた待機者の確保と、入退院時の連携を強化し稼働率の向上を目指す。

<真心の園ショートステイ>

安定した利用者数の獲得に向けた取り組みを年間を通し実施したが、新型コロナウイルスによる影響もあり、最終実績としては1日平均9.3名にとどまったが、定床化した特養枠を活用することはできた。ロングショート利用者や新規利用者獲得を継続しながら、稼働率90%を目標とし年間を通した稼働率アップへつなげていく。コロナウイルスに関しては引き続き感染予防を徹底し、安全安心にサービスの提供を行うと共に、可能な範囲で行事等も実施し、利用者の方に喜んでもらえる事業所づくりに努める。

<デイサービス事業>

・新規利用者獲得の為、各事業所を訪問してのPR活動、ケアマネージャーへの密な報告や情報共有により信頼関係の構築に努めた。又コロナ感染予防対策の徹底と事業継続計画作成に取り組むことができた。

・機能訓練については、個々の状態・身体機能に応じた訓練を実施し、自立支援と重度化防止に向けた取り組みができた。又利用者の意見・嗜好も参考に行事の内容を見直し、集団及び選択性での活動を実践した。

・リモート研修の参加・ネットでのフォローアップ研修を活用した内部研修を定期的で開催し、個々の知識、技術の向上を図った。又ミーティングを重ね 他職種連携図り統一したサービスの提供に努めた。

<訪問入浴サービス事業>

- ・利用者の状況把握や家族、主治医、ケアマネージャー等との情報共有し、感染対策に努め安全安心な入浴の提供ができた。
- ・終末期の利用者の受け入れや新規利用者獲得の為、ミーティング・研修実施し今後も質の高いサービス提供ができるよう努めた。

<ホームヘルパー事業>

(真心の園ホームヘルパーステーション)

- ・新規依頼はあるが職員の所得制限などがあり思うような新規の受け入れが出来なかった。
- ・報告、連絡、相談の徹底を心掛け皆で統一したサービスが出来るようミーティングでの意見交換・発言の場を設け、支援に取り組んだ。
- ・感染対策委員会や虐待防止委員会を立ち上げ指針作成・業務継続計画に向けた取組みを整備出来た。また、感染症対策を徹底しながら訪問を行った。

(鳥栖市中央ホームヘルパーステーション)

- ・職員の減少もあったが、その中でも空きの状況を随時確認し新規の受け入れを行った。
- ・利用者の訴えや変化に気付き、速やかにケアマネージャーに報告することが出来た。
- ・マニュアル表を活用し、サービスの統一を図ることが出来た。
- ・定期的にミーティングにて感染予防の意識づけを行う事が出来た。

<居宅介護支援事業>

- ・新規は積極的に受け入れたがそれ以上に入居や入院、死亡による支援終了が上回り支援者数が伸び悩んだ結果となった。
- ・感染症の影響で医療機関での面会制限が続いたが電話、ファックスなどで入退院時の連携を図ると共に退院後は速やかに訪問するなど利用者の生活に支障がないよう支援する事が出来た。
- ・感染症対策強化の為の業務継続計画の作成に取り組み、感染症対策委員会・虐待防止委員会を立ち上げ、指針やマニュアルの見直し、整備する事ができた。
- ・協議会や外部開催のリモート研修参加や事業所で取り入れたフォローアップ研修を活用し勉強会などの開催で改正内容の理解や介護支援専門員としての支援の資質向上に向けた取組みを行った。

<給食サービス事業>

- ・配食数・利用者数共に前年度に比べ、年間で鳥栖地区が3,784食増加、みやき町が2,213食減少した。利用者数は鳥栖地区が224人増加、みやき町は90人減少している。前年度に比べて年間1,571食増加になる。

- ・利用者のニーズ合った食事形態の提供、食中毒予防及びコロナウイルス感染予防にも努めました。
- ・利用者の安否確認を行ない、必要に応じて行政等への情報提供を行った。
- ・車両に関しては、車両点検・室内消毒等をし、安全運転を心がけるよう徹底をしました。

<鳥栖市鳥栖西地区地域包括支援センター>

鳥栖西地区地域包括支援センターは包括支援センター事業の委託を受け12年目を迎える。介護・福祉行政の一翼を担う「公益的な機関」として、公正、中立性の高い事業運営を今後も継続して行っていく。

地域包括ケアシステム構築に向けて、高齢者の生活を総合的に支えていく為の拠点づくりを目標とし、『住まい・医療・介護・介護予防・生活支援』を一体化に提供できるケア体制を推進し、高齢者がそれぞれの住み慣れた地域において、自分らしく安心して暮らしていけるまちづくりを目指し、各専門機関との連携を取り対応していく。

令和3年度も引き続き、感染症対策の為、各地域の活動が自粛傾向であった。その為、地域へ積極的ななかかわりも持つ事は出来なかった。その為、各地区の民生委員・区長との関わりを持ち、気になる高齢者世帯へは出向き相談を受け付け、状況に応じた各機関へと繋ぐ事が出来た。コロナ禍の状況で、検診や活動を控えた高齢者が多い為、令和4年度は自宅訪問を行い実態把握に努めたい。

<ケアハウス花みず木>

令和3年度は入居率99.8%で年間をとおして満床を維持する事が出来ました。取り組みとして、昨年に引き続き、感染予防対策を実施しました。入居者の体調面において健康チェック（現在も、毎朝の検温実施・必要者の血圧測定）を行い、各人の体調の変化が早期発見できるよう努め、家族・医療機関・福祉との密な連携を図りました。精神面にも気を配り、入居者の声・訴えに耳を傾け、不安・戸惑いが解消できるよう、日頃より状況把握に努め、共感と受容の気持ちで対応してきました。介護保険適用者が全入居者の4分の3以上を占めていますが、各在宅福祉サービスを利用し、自立生活の支援をしてきました。活動行事では、要介護者も参加できる環境を作り、自然に親しむ外出行事など行いました。居室への閉じこもりを防ぐ為、施設内での楽しみ（おやつ作りほか）を取り入れ、ケアハウスの入居者同士の交流も増え喜ばれています。

<グループホーム和が家>

・主治医や訪問看護ステーションとの連携により、利用者の体調管理や急変時の対応に努めたが、肺炎等で入院後、ホームに戻れない方が多かった。2、3ヶ月毎に病院や居宅介護支援事業所を訪問し、パンフレットやチラシを配布し、問い合わせはあるものの待機者確保にはつながらなかった。

- ・コロナ禍でもあり、屋内での行事やレクリエーションを行い、入居者も喜ばれた。

<グループホームみどりヶ丘>

- ・コロナ禍の中、入居者の健康管理に常時努め、医療機関等、関連職と密な連携・適宜対応を図った。
- ・入居者・家族の心理面の安定を図る為、定期的な報告と制限付きでの面会・外出の対応を行った。
- ・入居者が楽しめる様、月毎に内容を考え、行事・レクリエーションの実施を行い心身の活性化に努めた。
- ・みどりヶ丘団地の班長と定期連絡を行い、地区清掃や日常の会釈等、信頼・連携・協力体制作りに努めた。
- ・保育園とは交流は自重し、互いの健康面・安全性を確認しあい、協力体制作りに努めた。
- ・コロナ対策として施設内の環境整備、備品の補充・確保。職員の健康管理。対策会議を行った。

<みどりヶ丘保育園>

- ・延長保育は月決め利用者が増加し、日割り延長利用者が減少している。
- ・支援センターは地域の子育て中の若いお母さん方に対し、遊びの広場、公民館の出前保育等において育児相談を実施。子育てに悩むお母さん方のよき相談相手となっている。
- ・発達障害児が多くなってきたので、保護者との信頼関係を築き関係機関との連携を密にして早期療育に向けて努めている。
- ・同一敷地内のグループホームとの交流は、新型コロナウイルス拡大の影響で実施できなかった。

<まごころ保育園>

- ・職員枠の利用者が増えて17名（職員枠10名、地域枠7名）の園児を預かることができた。
- ・年間を通して未満児の問い合わせが多く、1歳児枠を3名増やして、受け入れができるよう柔軟に対応した。
- ・コロナ感染症の影響で中止となる行事があったが、その分玄関に写真を掲示したり、園での様子を保護者の方へお伝えするように努めた。
- ・発達障害児の対応に苦慮したが、保護者との信頼関係を築き、関係機関との連携を密にして対応することができた。

<グランドハウスまごころ>

2年目を迎えた昨年5月、開設後初めての満床を達成した。8月に2名の退居者が発生したが10月、11月とそれぞれ新規入居者があり、令和3年度末現在も満床を維持できている。新型コロナウイルスの影響により、今年度も相談受付や営業活動に制限がでる中ではあったが、関係

機関への電話や郵送での営業活動、またインターネットを利用した全国的な広報活動を継続的に行ったことにより、関係機関や相談者への周知が図れた。また入居者及びその家族、関係する機関よりの紹介も徐々に増加していったことも大きく影響し、年度末現在で5名の待機者を獲得できている。年間を通しての黒字化は達成できなかったが、半数以上の月において黒字化が図れた。来年度は年間を通しての黒字化を目指していく。

入居者へのサービス内容については、日常生活の支援や健康管理だけでなく、季節にあわせた行事やレクリエーションの提供、また個別の状態に応じた手工芸等の提供も継続できた。入居者数の増加に伴い、時間確保が難しくなっているが、来年度も継続して満足度の向上につなげていきたい。

法人内における当施設の位置づけについては概ね明確化されたが、協力医療機関や法人内での協力体制が十分にとれなかった状況がある。来年度も引き続き他部署との連携を密に図り、協力体制の強化・情報発信に努めていく。

新型コロナウイルス対策については、感染予防関連物品の確保、外出・面会制限などできる限りの対策を実施してきた。来年度も感染者が出ないように十分な対策を継続していく。

鹿児島事業部

<ケアハウスかせだ>

年間の新規入居者が延12名であり、内訳が在宅から8名、病院から4名でした。退居者9名、内訳が他施設へ5名、内法人内施設が3名、2名が死去で一人は施設内での事故死、2名が長期入院での退居でした。年間入居率 97.6%であり、4・5月の空床期間が入居率の低下に影響がありました。年間延べ入院者が596人で多く、年齢幅が66歳から100歳と大きく、平均年齢83.8歳、平均要介護度が1.3と昨年度から上昇しており、健康管理の大切さを痛感しています。新型コロナ感染症の影響で、多くの行事が中止を余儀なくされ、外出や面会の規制を強いられ利用者様には、ストレスを感じる日常生活となりました。

<デイサービス事業>

(デイサービス遊逢)

下半期にかけて施設入所が相次ぎ、急激に利用低下を招いた。新規利用者確保へ向けた営業活動は継続して行ってきたが状況は厳しく、入所により減少した利用を補うことも叶わなかった。また、認知症カフェを開催することができず、これまで相談や体験利用を通して利用者確保に繋がっていたこともあり、コロナ禍の影響がご利用者の施設入所、新規利用者確保の両方であった。今後も続く状況と、高齢者人口の減少もあるが、特色ある事業所として利用者確保に努めたい。

(デイサービス金峰やすらぎ館)

令和3年度は、新規利用者数は4件、利用終了者数は11件。昨年比で一日平均2.3件の減少。実人員が月平均4.6名減少。昨年度同様、利用回数が多い利用者の終了が多く、延べ人員、一日平均の数値が大きく減少。居宅介護支援事業所への営業を継続すると同時に、民生委員等との関係作りなどにより、地域における事業所の知名度を上げることを目指す。

(デイサービス有馬)

令和3年4月15日に開設し7月までは人員基準、利用者数を考慮し定員25名、週5日営業でスタートしました。8月セレーノの入居者が20人に達し利用者数の増加が見込まれたことから定員30名、週6日営業に変更を行いましたが、8月、9月セレーノの退居者が3名出たことから利用者数の伸びがありませんでした。その後10月、11月は延利用者数の確保ができました。12月～2月と入院者数の増加とコロナウイルス濃厚接触者の疑い等による営業日数の減少等により予実率の落ち込みがありました。3月ようやく安定したデイ利用をできる体制が整いました。今後は現在の利用者様の安定利用の継続に加えて外部デイの取り組みを行うことが当面の課題と思われまます。

<ほほえみヘルパーステーション>

令和3年度、21名の方の新規利用契約がありましたが、19名が利用終了となっております。年度末の契約者数54名で稼働率90%。内、実利用者数51名、稼働率が85%でした。6月にはヘルパー1名の離職があり5名での活動でした。思うように新規の受け入れができず、依頼をお断りしたケースも数件ありました。令和4年度は中期計画策定会議や理事長との面談等もあり、事業運営を考え直す良い機会となったと思います。

<かせだフレンドホーム>

看護師、サービス管理責任者が協働し、空床期間を長期化しないよう入退所、入退院の調整を行い入退所についてはスムーズに行えた。更なる他職種協働を図り入退院をスムーズに行っていく。また、各人の「気づき」を活かせる環境を作っていくことを意識して取り組んで習慣化することで利用者様の安全な生活、質の高いサービス提供と職員の定着率を図っていく。

<相談支援事業彩>

特定相談支援は障害支援区分見直しの利用者も少なかったことから今年度は計画作成、モニタリングともに前年度より減少となり、障害児相談支援については件数としては前年度とほぼ変わらなかったが、障害特性の強い児童や家族への支援も必要なケースが増加し、モニタリングやケース会議等を開催することが多かった。コロナウイルスの影響で在宅や事業所への訪問の自粛と再会を繰り返す状況となっているが、引き続き障害福祉サービス事業所や児童関係機関、医療機

関、地域、行政等との連携を図りながら利用者様、家族に対して適切な支援を提供できるようにする。

<グループホーム金峰やすらぎ館>

- ・年間通して人員の確保ができず、自事業所の業務を行う事でいっぱいになってしまい、他事業所との交流をすることがかなわなかった。
- ・県内にお住いの方等は、感染状況をみながら面会に来られたりすることもあったが、県外にお住いのご家族の方との繋がりをインターネットを活用し促していたが、なかなかオンラインでの面会に繋げることができず、入居者の皆様にも寂しい思いをさせてしまった。
- ・入院される方も少なく、入退居などもスムーズに行う事が出来、安定した入居率を残すことができた。

<グループホーム椎原館>

- ・令和3年度は、4月に1名、5月に1名、7月に1名が退去。いずれも、医療処置が必要となり病院に入院となっています。6月に2名、10月に1名が入居。在宅から2名、有料から1名の入居です。
- ・待機者は、5名です。入居の申し込み数は鈍化しています。
- ・4月に正職1名異動。5月に正職1名、6月に非常勤1名、7月に非常勤1名、9月に正職1名が退職しています。4月にフルタイムパート職1名、7月に非常勤1名、9月にフルタイムパート職1名、1月に正職1名が入職しました。人員不足が続き、他部署からの応援をもらいました。

<グループホーム有馬館>

認知症ケアの研修に積極的に参加し、また全職員が目標を立てて自己学習をおこないそれぞれスキルアップができた。成果としては入居者の暮らしの中で常に意思確認を行いながらケアに当たる姿も見られるようになった。コロナ禍でご家族や地域の方々との交流も少なくなったが、できる範囲で入居者の喜びややすらぎにつながる工夫ができた。またICTシステム導入により記録にかかる時間の削減ができ、入居者へ寄り添う時間も増えたようである。さらにデーターを元に入居者の健康管理も細やかにしないエビデンスを活用し心身両面へのケアに活かされている。

<有料老人ホームクオーレかせだ>

令和4年3月31日現在の在籍数は28名となっております。常に満床を心がけていますが、入院になって戻って来られなく退居となることも多くありました。そのため、新規入居者はありますが満床になってもまた、退居になったり有料老人ホームの難しさを感じます。病院と法人の連携を密に情報交換しながら実績をあげていきたいです。

<有料老人ホームセレーノ>

令和4年3月31日現在の在籍数は27名（単身24名 夫婦2組の入居者）入居率100%となっております。病院、他施設、居宅事業所、自宅からの空き状況の問い合わせも随時あり南さつま周辺地区へ配布のチラシ効果も大きかったと思われます。コロナ感染症により入居前の面会等できずフェイスシートや連携シートでの判断により入居判定をせざるを得なかったことで入居期間が短くて退居者数の増加につながる結果になりました。開設一年経過により入居者様の容態が安定しており長期間のご利用がなされるように健康管理と安心、安全な施設運営に努めて参ります。